

主 題	ヒヤリハットを活用し、介護事故ゼロへ！ ～その気付きを見逃さないで！～
副 題	新しいヒヤリハット用紙を活用し、介護事故ゼロを目指す。 また、ヒヤリハット事象に対する「気付き力」の増強

リスクマネジメント	「気付き力」の増強	研究期間	14ヶ月
-----------	-----------	------	------

事業所	社会福祉法人 仁生社 特別養護老人ホーム 中川園		
発表者：飛田野 真隆（ひだの まさたか）		アドバイザー：浅川 直（あさかわ なお）	
共同研究者：大野紀子・洲上真紀・内堀智章・橋本晴美・後藤由香・保田さつき・井上ゆか			

電 話	03-3607-4060	E-mail	info@jinseisha.jp
F A X	03-3607-4654	U R L	http://www.jinseisha.jp

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	当施設は、昭和43年に葛飾区内初の特別養護老人ホームとして開設。水と緑にかこまれた閑静な地に位置する中川園は、高齢者社会の進行に伴うニーズに応え、ご利用される皆様の安全と快適性を高め、託されたご家族にもご安心を提供すべく、より良い福祉環境づくりに努めています。
------------------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

中川園では、ヒヤリハット用紙を活用し、介護事故を未然に防ぐ取り組みを行っている。

しかし、ヒヤリハット用紙の提出で、事故に繋がる可能性を認識していたにもかかわらず、「危惧されていた事故が実際に起こってしまっている」という問題が続いた。これでは、ヒヤリハットが事故を未然に防ぐ役割を果たしていない！

この状況を改善するために取り組みを開始した。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

今まで使用していたヒヤリハット用紙を見直し、問題点を改善させた新たな用紙を作成。これにより、全職員がヒヤリ事象を認識し、意見を出し合い、決められた対応策をとる。

また、職員全体のヒヤッとした事象に対する「気付き力」を養うため、「ヒヤリ奨励職員」を設定。そして、どのようなこまかい危険事象であっても、漏らさず記録できる「気付きノート」。

これらの3つを使用し、命題である「ヒヤリハット内で危惧された事故が、実際に起こってしまっている」という問題の根絶、及び事故発生件数の低下を目指した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

まず、使用しているヒヤリ用紙の刷新に取り組んだ。これまで使用していた用紙の問題点を掘り下げ、改善を試みたのである。

問題点①ヒヤリ事象に対する改善案会議の時間が、なかなか取れない。特に発見者がパート職員の場合、勤務時間都合もあり難しい。

問題点②会議ができない事により、発見者独りの意見がそのまま改善案となり、他職員の意見が反映されにくい。

これらの問題点を改善させるため、「職員のコメント欄」を採用。これにより、会議を開かずとも、全職員の意見を反映させることが出来た。「危険の改善は鮮度が命！」と考える為、まずは出勤職員に、危険に対する暫定案を作ってもらおう。もちろん、当日に出勤していない職員にもコメントを書いてもらい、危険防止策が暫定案よりも相応しい意見であれば、その案に更新していく…という流れである。これで、用紙の問題点は改善されたが、命題であった「ヒヤリで危惧された事故が、実際に起こってしまっている」という問題解決には至らず、更に新たな問題が浮き彫りになってしまった。その問題点とは…。

《4. 取り組みの結果と考察》

如何に用紙が改善されたとして、書く側の職員の「気付く力」がなければ、「ヒヤリ」とは感じない。また「ヒヤリ」と感じて、感じた職員が周囲に発信していかなければ、同じような事象が起こる。この2つの要因を改善しなければ、命題解決には至らない！

そこで、「ヒヤリ奨励職員」と「気付きノート」を新たに設定した。「ヒヤリ奨励職員」を職員間でローテーションさせ、「気付く力」の底上げを試みたのである。

取り組みの結果、平成25年4月からの10ヶ月間、「ヒヤリで危惧された事故が起こってしまった件数」は6件あったが、平成26年3月からの短期間ではあるが、同様の発生件数はゼロに抑えられている。

《5. まとめ、結論》

取り組み開始以前から、ヒヤリハットは提出されてはいた。しかしながら、その内容は「事後報告」の割合が多かったり、提出する職員が決まっていたりと特徴があった。

全職員の「気付く力」の底上げと、ヒヤリ、ハットを感じたら、すぐに記載し周知できる環境。これが事故を未然に防ぐ事への肝であるのではないか。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

ヒヤリハット内において、実際に発生した具体例を示してはいるが、その内容において、個人特定ができてしまうような氏名の記載はしていない。イニシャルでもなく、Aさん・Bさんというような表示にしている。

《7. 参考文献》

特になし。

《8. 提案と発信》

高齢化社会が進むことにより、今後、様々なニーズを持った御利用者が増える事は容易に想像できる。その様な状況の中で、リスクマネジメントという考えは非常に大きな意味を持つことになる。

今後も「予想しえた事故」「予想しえなかった事故」と、さまざまな事故が発生してしまう事が考えられる。私達に必要とされるのは、「これをこのままにしておくと、こんな危険があるのではないか」という「気付く力」ではないのだろうか。

様々な職員が働く中で、1人1人、違った目線で危険を察知し、周囲に発信してくれる。そして、職員間でコミュニケーションを密にとり、危険を共有し、対応する。この取り組みを継続し、これまで「予想しえなかった事故」をも防ぎ、事故ゼロを実現できるよう、取り組みを進めていく。

【メモ欄】